

日本学会議 in 北海道

——「ふるさと」から学術を考える

寶金清博

日本における「地域」コミュニティの過疎化と環境変化は、急激である。筆者の「ふるさと」においても、この60年余りの期間、地域は力を失ってきた。その中で、地域における学術に関して、日本学会議がこれまでに、十分な機能を果たしてきたとは必ずしも言えない。今回、北海道において、地方学会議 in 北海道を開催した。その取り組みを紹介する。今後、①学会議の課題を地方で議論する場としての役割、②学術の広報的役割、③地域の問題を取り上げる学会議の役割という3つの役割を、地方学会議が十分に果たしていくことが期待される。特に、ポスト・コロナにおける地域活性化に関して、日本学会議の責任は非常に大きい。

キーワード 地方学会議、地域、SDGs

私の“ふるさと”

最初に、私事から入らせていただく。

北海道南部の日高地方にある新ひだか町の東側に三石という地域がある。私は子どもの頃から札幌市に住んでいたが、親戚がいたこともあり、小学校入学前から中学生までの10年余り、夏休みのほとんどをこの小さな田舎町で過ごした。

三石町は、太平洋に面し、1960年代は、漁業と特産の昆布漁（三石昆布）で繁栄し、競走馬育成牧場でも有名な美しい町であった。多様な生物系に彩られ、最高の潮干狩りができる遠浅の長く豊饒な海岸と美しい田園風景のコントラストが見事な町であった。

少年の私は、野山を走り、桑の実を集め、浅い海に潜ってウニを取り、家の裏の小川で流木と砂利のダムを作って、川蟹や小魚を集める毎日を過ごした。日差しの強い晴れた日には、早朝から、昆布採りの手伝いをして、子どもの私でさえ、小銭の小遣いを手にすることができた。夏の終わりには、真っ黒に日焼けして、小さいけれども立派な国鉄三石駅で親戚に見送られ、何両も繋がった

国鉄の列車に乗って札幌に戻ってくるという夢のような夏休みを過ごすことができた。

正確な記録を見つけることはすでに困難になっているが、当時の北海道三石町には、ピーク時には人口が一万を超えていた¹。高度成長期にあった日本で、この田舎町にも十分な賑わいがあり、教育施設も高等学校まで存在した。夏の港まつりは、人々の熱気に包まれ、血の気の多い漁師の若者で溢れていた。

商店街の中には町で唯一の映画館があり、夏休みの最高の贅沢は、年長の従兄にその映画館に連れていってもらったことだった。

地域コミュニティとしては、今振り返るとユートピアであり、追憶による美談化を差し引いても、現代においてもあるべき地域社会の完成形を示していた。

その後、この年齢になるまで、墓参と毎年残り少なくなってゆく親戚への挨拶も兼ねて、50年以上、この小さな町を訪ね続けてきた。この間、この典型的な地域の町の過疎化と気象変動に伴う風景の変化を見続けてきた。

その詳細は語るまでもなく、ここ半世紀余り、日

本中で見られた典型的なストーリーがそこにあった。人口は4分の1以下になり、三石町は、隣の静内町に合併され、「新ひだか町」となり、鉄道は廃線となった。高等学校ははるか以前に廃校となり、商店街はわずかにその名残が残るのみである。

豊かな潮の満ち干があり磯の香りに満ちた美しい海岸は、削り取られて、寒々しいテトラポットの光景だけが残った。町には、若者の姿は少なく、高齢者の姿が目立ち、新しい目立つ建物は、介護施設。

唯一、美しい競走馬育成牧場の田園風景だけが昔の三石町の面影を残している。まるで、私が過ごした60年前の小さな繁栄を見せていた三石町は、私の想像上の産物であったかのようである。それでも、少なくなった私の親戚も含め、人々はこの町を愛して生きている。

地域と学術

個人的な感傷の追想はここまでとするが、おそらく、本誌の読者や日本学術会議の会員の多くが、記憶の中に、それぞれの「三石町」をもっているに違いない。この名もなく、自治体としての町村単位としてはすでに消失した三石町に起こったこと、そして、現在も進行中であるこの地域の問題は、私の住んでいる北海道における地域全体に起こっていることである。そして、それぞれ、経緯や速度感、規模感は違うものの、日本中の「地域」で起こり、現在も加速度的に進行している。

その中で、この数十年、「学術」がこの地域の課題に対して何をしてきたのかを検証する必要がある。この問題は、極めて重大であり、データに基づいたエビデンスベースであるべきで、この拙文の責任の範囲を逸脱する。

ただ、日本学術会議は、その創設から最近に至るまで、基本的には、主要な大学・研究所を中心

とした組織であり、当然のことながら、その中心は政令指定都市を中心とした大都市部の総合研究大学の知的エリート集団の視点であったように思う。

学術の中でも中心となる生命科学、工学、理学などの理系科学や主要な文系科学が、大所高所から、一般的・普遍的・科学的事実の究明を指向する本質を持つ以上、やむを得ない点もあるように思われる。地域の課題に応える学術は、学術の本丸ではなく、二次的な位置づけを強いられてきたように思われる。言葉を変えると、「実学」の一部として、応用科学として、個々の地域課題に適應されてきた。

日本学術会議も、この点は十分に意識しており、「地域」を意識して、委員会を立ち上げ、提言においても、地域が直面する課題をいくつか取り上げてきた。しかし、学術会議の直近の3年間の「提言」のテーマを振り返ってみても、直接に地域の課題に対して正面から向かい合ったものは必ずしも多くはない²。

もちろん、「高齢化社会」「地域防災」「地域医療」などを取り上げているが、全体としては、多くはない。事実、個別の地域の課題は、類似点はあるものの、それぞれに、独自の地誌的な影響、歴史的背景があり、その一つ一つに対して「日本学術会議」が個別に対応することは、現実的でない。地域課題は、まさに、個別の地域の背景を知り尽くした地域の学術機関が対応すべきものである。

ただ、一方で、「三石町」に起こり、日本の全ての地域に起こった深刻な課題は、学術の根幹にも関わり、その多くは地域の個別の学術機関が対応すべきことであるが、日本の学術の全体を俯瞰すべき「日本学術会議」もその責任を逃れることはできない。

特に、現在、地域の問題に向き合うことが世界の課題解決につながるという、Think Globally, Act LocallyというSDGsの考え方を見ても、学術全体

として、「世界の課題」を考える際に、身近な地域の課題と正面から向かい合う必要がある。

個別の地域の課題と学術の普遍的な課題の関係は相補的なものであり、地域の問題に向かう際も、普遍的・本質的な問題を見だし、これに提言を行い、学術としての可能な限り貢献を強く意識すべきである。その意味で、今回、地方学術会議を設定した意義は極めて高いし、今後の日本学術会議の発展を左右するものになると考えられる。

私と同郷の北海道生まれの中島みゆきさんの曲「地上の星」の歌詞を借りれば、「空にあって輝くもの」だけを追い求めるのではなく、「地上の星」に目を向ける必要がある。

日本学術会議 in 北海道

第24期において、地方学術会議が設定され、北海道は、最初に手を上げさせてもらった。それは、前述のように、私自身が、「地域」の深刻な課題を実感する機会があったこと、そして、課題先進地域である北海道においてこそ、この地方学術会議を開催すべき地域であると考えたからである。地方学術会議は前例がなく、また、限られた予算と日程の範囲の中で、企画において、以下の3つの視点のどこに注力するかが課題となった。それは、

- ① 学術会議の課題を地方で議論する場としての役割
- ② 学術の広報的役割
- ③ 地域の問題を取り上げる学術会議の役割

の3つであった。

第一回目は、開催形式、開催内容、規模などの点で、全く、一から始めることばかりで、非常に苦勞したことも事実である。その中で、上記の3つの視点をそれぞれに短時間でも実現できるプログラムを考えた。

特に、①の観点で言えば、学術会議のメンバー

シップ制を考えると、専門的な学術の基盤に基づいた「アカデミア」としてのクローズドの会議という側面がある。一方、②③の観点から言えば、国民に開かれたアカデミアの広報・対話活動というややベクトルの異なる活動が求められ、わずか一日程度の開催で、この3つをどのように調和させるかが課題であった。

その結果、地区会議を二部構成とした。前半は、メンバー限定で、「多様性・共生の地域社会を目指して」というテーマで、北海道の会員、連携会員から、それぞれの専門領域から話題を取り上げて、4つの話題が提供された。それぞれが、地域に深く関わる問題であり、アカデミアとしての地域への問題にどう関わるかという点で、活発な議論がなされた。

後半は、一般公開の学術講演会を開催し、①の学術会議の直近の課題を地方でも議論する場を提供しつつ、加えて、②の学術会議の広報活動として、地域の市民に広く参加してもらう機会を提供した。テーマは、「Society 5.0で北海道が変わる(AI・IoT・RT技術の地方深化)」というテーマで、道外からの専門家2名を含めて3名のエキスパートによる素晴らしい講演が行われ、総合討論も行われた。

会終了後、これまで、地区会議では、会員同士の情報交換も希薄であり、まして、連携会員を含めた北海道地区会議のメンバーの交流は皆無であったことを考慮し、貴重な機会と考え、会員・連携会員懇親会を開催した。この際、これまで、地域での学術会議会員や連携会員の交流が乏しく、また、連携会員においては、学術会議の活動への理解や関与が十分でないことが、改めて、実感された。

ポスト・コロナ禍と地域の学術

ポスト・コロナ禍では、K字型回復現象と呼ばれることが起こると言われている。コロナ禍による落ち込みから、逆にリバウンドとも言える力強い回復を見せる企業や地域、国がある一方、逆に力を失い下降を止めることのできないグループが現れ、全体として、格差が極端に拡大すると予想されている。

コロナ禍によって、人口・資本・密集度の低い地方へ知的資本の移動が起こるのではないかと、地域にとって楽観的な予測もある。しかし、日本における「地域」が、今後、このK字の上昇グループになるのか、下降グループになるのかは、現段階では予断を許さない。しかし、いわゆる Society 5.0の構造を考えると、知的資本の移動と経済資本の移動とが重なることは容易に想像される。従って、あるべきポスト・コロナ禍の社会を考えれば、学術の指導的役割を担う日本学術会議は、積極的に知的資本の地方移転を先導すべきである。

こうした先行き不透明な中で、日本学術会議が、「地方学術会議制度」をさらに強化して、地域に体重移動することは大きな意味がある。個々の地域の課題に対する取り組みを支援する仕組みを意図的に構築すべきである。地域の課題解決なしに、世界や地球が抱える深刻な問題解決は不可能であり、地域課題への取り組みは「学術」の支援なしにはあり得ない。今後、この地方学術会議の発展を強く期待している。

ポスト・コロナの世界が「勝者総取の世界」とならないことを祈るばかりである。

PROFILE



寶金清博 (ほうきん きよひろ)

- ・日本学術会議連携会員
- ・国立大学法人北海道大学総長

【専門】
脳神経外科学

文献

- 1 日高三石町の人口推移
<http://demography.blog.fc2.com/blog-entry-5237.html>
- 2 日本学術会議・提言
<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/division-15.html>